

特集 第24回 広島大学心理臨床セミナー講演録

「死」を語り合うこと
～ナラティブ・アプローチからの試論～

川島 大輔¹

Daisuke Kawashima

“生に耐えようとすれば、死にそなえよ”
Freud, 1915/1969 『戦争と死に関する時評』

1. はじめに

本日は、「死」を語り合うことについてナラティブ・アプローチから論じることを試みたいと思います。

本題に入る前に、死を扱う学問である死生学（Thanatology, Death Studies）における死の捉え方について確認しておきます。まず死生学の分野では人称別に議論されることが多いのですが、大きくは1人称、2人称、そして3人称の死と区別されます。1人称の死とは、いわば自分自身（我）の死のことです。自分自身の死そのものは経験できませんので、通常は、死を意識させる病いの経験、臨死体験、死にゆく過程での予期悲嘆と受容といったテーマで研究が行われています。次に2人称の死です。これは身近な他者（汝）の死のことです。ここでは死別後の悲嘆・グリーフ（grief）などが検討されます。そして3人称の死とは、遠い他者の死です。死の概念理解などは3人称の死を扱っていると言えるかもしれません。このように人称別には3つに分けられるのですが、死生学の領域では死を意識させる病いの経験（1人称の死）や身近な他者との死別経験（2人称の死）といった臨床的・実践的なテーマが多く検討されてきました（川島・近藤, 2016）。そしてその中で、人が死後の世界を創造したり、自分の死後も遺され続けていく何か（例えば子孫や仕事など）に関心を寄せ、物語る行為も着目されてきました。Robert J. Liftonによる不死性（immortality）の議論もこれに関連するでしょう。本日は、こうした「死」をめぐる様々な物語の可能性と限界について考えてみたいと思っています。

なお死生学、特に死生に対する心理学的研究では、その検討領域をさらに大きく4つ（死への態度、死にゆく過程、死別後のグリーフ、自殺）に分けることがあります（川島・近藤, 2016）。また臨床実践に焦点化すると、エンド・オブ・ライフケアを背景にしつつ、グリーフケア、死の不安の軽減、自殺予防といった実践的なテーマにも注目が集まっています（Neimeyer, 2005）。本日は時間の都合から、このうち特に2人称の死であり、かつグリーフケアというテーマに焦点をあててお話

¹ 中京大学心理学部 准教授

を進めていきたいと思います。

2. グリーフワークと死を語ること

今日、グリーフについての理論や研究知見はかなりの蓄積を得ています。ここではそこでの知見を概観した上で、「死」を語るることについて考えてみたいと思います。

まず確認しておきたいのは、死別経験は「逆境」だという事です。実際、死別経験は様々なリスクを高める事が、多くの研究によって指摘されています。リスクとしては、例えば死別後の死亡率の上昇 (Agerbo, 2005)、自殺企図の増加 (Ajdacic-Gross, Ring, Gadola, Lauber, Bopp, Gutzwiller, & Rossler, 2008)、複雑性悲嘆 (complicated grief) (2013年に改訂されたDSM-5では「持続性複雑性死別障害」(persistent complex bereavement disorder)の名称が使用されています)などが挙げられます。ただし、同時に忘れてはならないのは、人はこうした逆境や苦難にただ打ちひしがれているだけではないという事です。今日のグリーフ理論では、喪失を意味づける行為の重要性が広く認識されており、人を、苦痛に打ちひしがれる受動的な存在から、能動的な行為主体と捉えるパラダイム転換が起きています。私が関心を寄せている意味再構成理論 (Meaning Reconstruction Theory) もそうした認識に立つものの一つであり、「人間は人生の目的や生きる意味を見出したり、創造したりする心理学的欲求に突き動かされており、それ故どのような体験にも何らかの意味を探り出す存在である」(Neimeyer, 2001) 事をその基本理念としています。

そして死別後の意味探求について検討する上で欠かせないのが物語あるいはナラティブ (narrative) という観点です。例えば遺された人は、「死んでしまった人がもういないのだということを受け入れて、自分の苦悶を処理し、打ち砕かれた生活を立て直して、永久に死別によって色づけられることになる人生の物語の次の章に進む」(Attig, 1998) 事を余儀なくされます。そして死別は、自己物語を混乱や機能不全といった危機に陥れる「意味の危機」(Crisis of Meaning: Neimeyer & Anderson, 2002) であるがゆえに、死別後には物語の語りなおしが求められます。

ここで物語の定義について確認しておきましょう。まず物語には語られた物語と物語る行為という2つの側面があります。とくに物語る行為に着目すると、経験を組織化し意味づける行為 (Bruner, 1990/1999)、あるいは2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為 (やまだ, 2000) と理解されます。グリーフに話を戻しますと、自己あるいは他者の死に直面することは、それまで暗黙裡に想定していた世界 (これも一つの物語と言えます) を揺るがし、あるいは自己と他者との亀裂を生み出します。そしてその経験を組織化するため、あるいは、ばらばらになった世界をむすびつけて筋立てるために、新たな物語が求められ、語りなおされるわけです。

グリーフワークを念頭におくと、危機の大きさによって語りなおしの困難性も変わってきます。例えば、事故や殺人などの暴力的な死を経験した人は、その経験の意味を理解することがより困難であると言われていています (レビューとして、川島, 2008)。また再構成された物語自体も、肯定的な内容だけでは限りません。暴力、殺人、自殺で子どもを亡くした親の意味理解は、「死の不公平さ」「死についての情報や説明を求める」「得られた情報に基づく原因帰属を行う」「死の責任についての自問」といった肯定的内容と否定的内容の両方が混在していることも報告されています (Murphy,

Johnson & Lohan, 2003)。自死で身近な人と死別した人は特に経験を意味づけることが困難になること、そしてその意味づけの程度がその後の適応にも関わっていることも、私どものこれまでの研究からうかがえます (Kawashima & Kawano, 2017a; 川島・川野・小山・伊藤, 2010)。

ここで、意味の探求と物語の関係を理解していただくために、少し事例をお示しします。これは息子さんを自死で亡くされた中年期女性（フミコさん：仮名）の語りです。

F: あの、犯人探しをした時期があったんですよ。例えば、いじめで死んだり、借金でと言うのはある程度犯人探ししますよね。(略) 一生懸命メールを読んだり、日記を読んだりしながら、原因を探してたりした時期があったりしたんですけど。

K: 1ヶ月後くらいのことですか。

F: そうですね、死んですぐの頃ですね。それにしか頼れなかった時期っていうんでしょうかね。

(略) でも結局ね、これ(手記)書いてて、あっと思ったんですけど、犯人は、私です。っていうことなんです。(略) 犯人は、母親の私です。きっと命をつないでやれなかったのは私です。死にたいというメールをもらいながら、結局はあの子を生に導いてやれなかつ

フミコさんの意味探求とそこで見出した物語は、「息子の死は母親である私の責任」です。自責感や自己非難は自死遺族に顕著に見られるもので、病理的な観点で検討されることもあります。ここでは意味再構プロセスと物語の構造に着目します。実際、「自分自身に責任がある」と意味づけることは大きな苦痛を伴うものですが、フミコさんはどのようにこの物語を自分自身のものとして語りえたのでしょうか。その鍵は他の語りにあります。フミコさんが、弱音を吐く姿を残された他の子どもたちに見せないように配慮していたこと、息子の同級生に対する影響を心配していたこと、国内外で起こる様々な子どもに関わる事件に心を痛めていたこと、そして何より繰り返し「母親」と口にしてきたことから、子どもを「つつむ」(やまだ, 1988) 母親という一貫した物語がうかがえます。息子の死を自分の責任として引き受けることを可能にしているのは、日本の社会文化に広く流布する「母親」というフォークイメージと理解することもできるように思います。

ところでフミコさんは、さらに興味深い別の物語も語ってくれました。それは本日の冒頭でも触れた、死後世界の物語です。まずは語りを見てみましょう。

F: (占いのおばさんに) 今あなたの息子さんは、あなたの息子として見てるんじゃないくて、親のような慈愛で、あなたたちの行く末を見てるから、もう安心しなさいっていわれたのね。それ聞いてすごく楽になったんですよ。(略) なんか、ほんとのようになっていうか。嘘であっても、自分の中で思えるきっかけになれて、よかったなと思いましたね。

この「親のような慈愛で見守ってくれている」物語は、母親として子どもをつつむ私から、子ども（前世では親）につつまれる私へのポジションの転換を可能にしています。こうした事例からは、「死」を語り合うこととはすなわち、死そのものと同時に、死までの生、死からの生についての物語を語り合うことと言えるかもしれません。なお、この2つのポジションは、入れ子になっているというよりは、フミコさんは2つのポジションのあいだを揺れ動き、揺蕩いながら語っているのですが、ここではひとまず「あの世」についてのフォークイメージの重要性を指摘することとどめ、話を先に進めましょう（事例検討の詳細は、Kawashima & Kawano, 2017b をご覧ください）。

さて、これまで見てきたように、死別後のグリーフをその人らしく経験する上で、物語という観点は欠かせないのですが、トラウマ的な死別を経験した場合は、それがより困難になります。その際、実践的に有用なものの一つとして、ナラティブ・セラピーにおける「人々が人生という川をみるために「河岸に立つ」のを助ける」（White & Morgan, 2006/2007）というメタファーが挙げられるでしょう。それは、まず安全を確保し、どのようにトラウマ経験に対応してきたのかという歴史を辿り、トラウマが人生にどう影響したかというストーリーとは別（第2）のストーリーを発展させ、そして第2の（オルタナティブな alternative）ストーリーを展開することによって、トラウマについて話すことを可能にする「立つべき別の場所」を確保することです。

関連して、意味再構成を支えるナラティブ・ワークの前提も確認しておきましょう。この観点からは、意味再構成のプロセスとナラティブとの関係について理解すること、能動的に意味を再構成する主体として遺族を捉えること、そして死因や疾病をめぐる様々な社会文化歴史的な文脈（例えば、つつむイメージ、スピリチュアルな物語、自死のスティグマ）に配慮しつつ、意味再構成を促す足場となることの重要性が、挙げられるでしょう。ナラティブ・ワークの例もお示しします。「喪失の影響地図」（川島, 2014）は、「外在化実践」つまり「問題（影響）結果」のストーリーから解放することを目指したナラティブ・ワークです。大切な人との死別経験を中心に据えて、その影響をマッピングし、語ることを通じて、支配的なストーリーに代わる、オルタナティブなストーリーを見出す足場となることを意図しています。具体的な手続きや臨床実践に向けた示唆などは、Kawashima (2015) をご参照ください。

具体的な支援方策についても少し見てきましたが、ここでひとまず確認しておきたいことは、「死」をめぐる様々な物語を語り合うことは、「死」そのものを語るための足場を構築することを含む、ということです。

3. 「死」を語らないこと、「死」を語れないこと

さてここまで意味を求める、物語するという側面に焦点化してお話をしてみました。しかしながら、ここで「死」を語らないこと、そして語りえない「死」についても触れておかなければならないでしょう。

まず死別研究の中でもよく知られているレジリエンスと二重プロセスモデル (dual process model) について触れましょう。レジリエンスには様々な定義がありますが、Bonanno (2004) による検討では、レジリエンスは深刻な状況下においても、良好な健康状態を安定して保つ事ができる能力で

あり、一定の時間経過の後に、もとの状態に戻る回復（recovery）とは区別されています。そしてレジリエンスを発揮する人は意味をあまり求めないことが指摘されています。また二重プロセスモデル（Stroebe & Schut, 1999）は、喪失志向と回復志向の2つの対処を行き来するモデルですが、回復志向に定位している際には、悲嘆の回避や否認が起こるため、死別経験が積極的に語られることはありません。このように「意味を探求し物語る」ことを行わないプロセスや状況があると言えます。

また語りに着目しようとする際、私たちはどうしてもその人の意味世界に眼を向けがちですが、当事者のニーズが必ずしもそれと一致するわけではありません。死別経験を誰かに語ることよりも、労災申請や相続放棄などの様々な手続き、生活の維持についての具体的な情報提供といった支援が望まれる場合もあります。「こころのケアよりも経済的支援を」といった声を耳にすることもありますが、これも死別経験について語ることを求められていない状況がある、ということを示しているでしょう。

その他、喪失自体があいまいで語りえないこともあるでしょう。そしてそのあいまいさゆえに、周囲の理解やサポートを得られにくいこともますます語りを困難にします。あるいは自死などに対するスティグマや、「私たちは病気じゃない」といった反発の背後に垣間見える精神医療への抵抗感もまた、語る行為を阻害する要因の一つでしょう。したがって、死別経験を語るためにはまず、遺族を取り巻く社会文化的文脈に十分な配慮を行い、必要な足場を整えること、そしてその人が語りうる時期であるのかを見極めることもまた支援の重要な方策と言えます。

ところで、語らない「死」と、語りえない「死」は同じでしょうか。前者は語り手の意思のようなもの、つまり「（あえて、いまは）語らない」が込められているようにも思えますが、後者は語ることの限界性、あるいは非語りというナラティブ・アプローチの難題を暗示しています。まずは次の事例を見てみましょう。

F：家族でゲームをしてるわけ、（中略）それを私が台所でご飯とか作りながら見てるわけですよ。すると、これ以上の幸せないなって思ってた時期が、あるんです。そういうことを願うと、いいことないかなっていうか。これ以上の幸せはもうないって。こんな幸せな

この語りは前掲のフミコさんの別の語りです。ほとんどの語りは先に述べたような、母親あるいは息子につつまれる私という一貫性に沿っているのですが、それによって全ての語りが統合されるわけではありません。このどこにも位置づかない語りは、果たして誰に向かっているのでしょうか。それは聞き手である研究者に対してかもしれませんし、故人に対してかもしれません。自分自身に対してなのかもしれません。あるいは、この語りは、取り戻せない過去、そして現前しなかったあの頃の未来に向かっているのかもしれません。

次は、ある高齢者の戦争体験の語りです。

J: (空襲の)熱気がザーと燃えてくるから、髪の毛がみなチリチリに、でしょ。で(防火用の)水入るでしょ。だから首から上なんかは、普通の人間で、そこから下はもう、どぎえもんの、ばあーと膨らんだような形。それをねー、うーん、鳶口言うて、ピッケルみたいなもんで、あんなんで引き上げてねー。トタン板の上段に棒をこうつけて、担架を作ってね、でそこに乗せて運んで行って、その、ま、収容場所に、ずっーと並べるんですよ。半分焼けとるのもおるし、もう全然どぎえもんみたいななんもおるしー、もうほんとに、焼けたんは焼けたんで並べとったけども、なんかメザシの焼いたみたいな感じで(遠くを見て少し笑いながら)。[K: ああ。]

ここで語り手である二郎さん(仮名)は、なぜ遠くを見て、笑いながら語ったのでしょうか。言葉にならない出来事で真剣には語りえなかったのでしょうか。あるいは戦争を体験していない聞き手への配慮があったのでしょうか。そして聞き手である私自身は、戦争の悲惨さや当時の状況の惨さは語りからあるいは推測できるが、圧倒的な語りの暴露にさらされて「ああ。」「うーん。」として応答できていません。確かに二郎さんは当時の経験を口にしてはいます。しかしそれが物語としてまとまるわけでもなく、また語り手と聞き手のあいだで共有されることはありません。

このような事例を見てみると、そもそも死を語り合えるのかという疑問が湧いてきます。実際、これらの事例のように、語り手の視線の先を思い描くことは容易ではありません。インタビュー(interview)と言いますが、視点と視点のあいだ(Inter-Views)とは一体どこでしょうか。川野(2008)は、ポーの小説「盗まれた手紙」を論じたフーコー、デリダ、そして東を引きながら、語りの内容そのものはわからないが、「開封されない手紙」に返事を書く行為として、このことを論じています。ここで見てきた語りもまた、聞き手が尋ねることでその経験がさらに掘り下げられたりせず、死(別)の経験そのものを語り合っているとは言えません。他方で、二人のあいだのやりとりにはどんな意味があるのでしょうか。それを考えるためには、「封がされたまま」の秘密(川野, 2010)として保たれたまま、二人のあいだを成り立たせているものに配慮することが必要でしょう。非常に難しい問題ではありますが、この点についてももう少しだけ掘り下げてみます。

4. 「死」を語り合うこと

ここまで「死」と語りについて見てきたわけですが、一旦立ち止まって、そこで語られる死とは何なのかについて考えてみることに意味があるのではないかと思います。冒頭に死生学における死の人称や研究テーマについて見てきましたが、そもそも死には、生物としての死(活動の停止、肉体の変化・腐敗)という側面と、社会文化歴史における死(葬送儀礼、聖化、象徴化)という側面があります(もちろん他の分類も可能でしょうが)。これまで議論してきた際に暗黙裡に想定されていたのは後者です。そしてそれは文化に流布する物語によって語りうるものとなります。しかし「死」には前者の側面もあることを忘れてはいけません。前者の生物としての死、それも自分自身や身近な他者の生物としての死が、私たちの日常において、語りの俎上に上ることは滅多にないでし

よう。しかし時折、「不気味なもの」として現前することもあります。それは例えば、遺体の冷たさに慄くあの感覚でしょうか。独特の臭いに眩暈を覚えることでしょうか。死別後の悲嘆が複雑化しやすい要因の一つに、遺体の状況や亡くなった瞬間を目撃するなどのトラウマティックな経験が挙げられますが（e.g., 瀬藤・村上・丸山, 2005）、先の事例として示した戦争中の経験が語りえないこともこの点と関わっているでしょう。後者の社会文化歴史における死もこれまで見てきたように、常に語られるわけではありません。他者との関係性や社会文化的文脈に照らして語られないということもありますが、ここで着目したいのは、慄かせるもの（それは例えば、自らの死の予期を現前させるもの）は秘密のままクリプト化²されるということです。それはおそらく、私たちは無意識のうちに、自分の死という考えを拒否している（Freud, 1915/1969）からでしょう。死に慄きながら、その経験の意味を求め、語ろうとすること、これが「死」を語ることの本質なのかもしれません。

改めて、「死」を語り合うとはどのような行為なのでしょう。自分自身の死は経験できず、その死を思い描くだけです。自分以外の死も経験できず、失った経験とその悲しみという形で経験し、また不可能な喪として体内化（incorporation）されます。その死は、たとえ何らかの形で語られたとしても、自分自身のものには決してなりません。こうしてみると、いずれの死も決して経験することのできないもの、不可能性として現前すると言えます。別の言い方をすれば、死とは「他者」であると言えます。死そのものは現前することはなく（すなわち非一現前）、何か語られたとしても、語り尽くされることはなく、秘密は常に残されるのです。

それでは死を語る際、その語りが「あう」ことはあるのでしょうか。死を語り合うこと。それは幻想なのかもしれません。しかし見方を変えれば、死という他者を語るという行為は常に、事後的に、つまり何かの後に、時間的に遅れて発生するとも言えます。それは自らの死を予期した場合でも、身近な人との死別を経験した場合でも、突如現前した「死」という他者に対して、慄きつつ、応答するからです。そして「死」への応答が、二者あるいは複数の人とのあいだで行為されることが、「死」という、語りえない「秘密」を語りあう（会う、合う、逢う）ことと言えるのではないのでしょうか。この議論はさらなる深みを目指していくこともできますが、私の理解をはるかに超える場所を目指すことになりすし、本日はこれ以上立ち入らないことにしましょう。

5. まとめ

「死」を語り合うことについて、語りの有効性とともにもその限界点についても見てきました。別の言い方をすれば、「死」を意味づけ語り合うことによってグリーフを促進させることができると同時に、それが求められない状況や、語りえないものが常に残されることへの配慮を怠ってはならないことを見てきました。

そもそも語ることは、何かを語らないことです。物語は、うまくまとまるように語られます。そのために、言葉の並べ方を変え、一部を省略したりします。そしてそこに「秘密」が残されます。

² クリプト（crypte）とは「秘密の」「隠された」「暗号化された」などを意味する語であり、納骨や礼拝のための地下埋葬室などを意味する。クリプトは不可能な喪の場所であり、その住人は常に「生きた死者」である（Derrida, 1976/2006）。

臨床実践の場を想像してみても、死別当時の生々しい経験は、相談者だけでなく、相談従事者によっても、語られない「秘密」として隠されることがあるでしょう。自分自身の過去の記憶が蘇ってきて、支援者がつい話題をそらしたりしてしまうこと、あるいはあまりに辛すぎる様子を示した時、支援者があえて別の話題を振ることもあるでしょう。どのような応答を行うのかによって、両者のあいだで紡がれる物語は千変万化します。ここから「死」を語り合う際に、自分自身のどのような経験や前提がその場の語りに影響を及ぼしているのかについて省察することの重要性が浮かび上がってきます。

最後に、冒頭で示したフロイトの言葉を思い出しておきたいと思います。ここでの「死」とは誰のどんな死でしょうか。それに「そなえる」とはどのような行為を指しているのでしょうか。ひょっとすればそれは、語りえない「死」という「秘密」に対する気遣い (Derrida, 1999/2004) を意味しているのかもしれない。

文献

- Agerbo, E. (2005). Midlife suicide risk, partner's psychiatric illness, spouse and child bereavement by suicide or other modes of death: A gender specific study. *Journal of Epidemiology and Community Health*, 59(5), 407-412.
- Ajdacic-Gross, V., Ring, M., Gadola, E., Lauber, C., Bopp, M., Gutzwiller, F., & Rossler, W. (2008). Suicide after bereavement: an overlooked problem. *Psychological Medicine*, 38(5), 673-676.
- Attig, T. (1996). *How we grieve: Relearning the world*. New York: Oxford University Press. (アティグ, T. (1998) 死別の悲しみに向きあう (林 大, 訳) 大月書店)
- Bonanno, G. A. (2004). Loss, trauma, and human resilience: Have we underestimated the human capacity to thrive after extremely aversive events? *American Psychologist*, 59(1), 20-28.
- Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. (1999) 意味の復権——フォークサイコロジに向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳) ミネルヴァ書房)
- Derrida, J. (1999). *Donner La Mort*. Paris: Galilée. (デリダ, J. (2004) 死を与える (広瀬浩司・林 好雄, 訳) 筑摩書房 (ちくま学芸文庫))
- Derrida, J. (1976) Fors: Les mots anglés de Nicolas Abraham et Maria Torok. In N. Abraham & M. Torok, *Cryptonomie: Le Verbier de l'Homme aux Loups* (pp. 7-73). Paris: Éditions Aubier Flammarion. (デリダ, J. (2006) Fors——数々の裁き/を除いて ニコラ・アブラハムとマリア・トロークの角のある言葉 アブラハム, N. トローク, M. 狼男の言語標本——埋葬語法 of 精神分析/付・デリダ序文《Fors》(港道 隆・前田悠希・森 茂起・宮川貴美子, 訳)(pp.173-241) 法政大学出版)
- Freud, S. (1915). *Zeitgemäβes über Tod und Krieg*. (フロイト, S. (1969) 戦争と死に関する時評 (森山公夫, 訳) 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎(編), 性欲論・症例研究(フロイト著作集 5)(pp.397-420) 人文書院)
- 川野健治 (2008). 自死遺族の語り——今、返事を書くということ やまだようこ (編) 質的心理学

- 講座第2巻 人生と病の語り (pp.79-99) 東京大学出版会
- 川野健治 (2010). 秘密, もしくは立ち上がる主体のために 質的心理学フォーラム, 2, 5-10.
- 川島大輔 (2008). 意味再構成理論の現状と課題——死別による悲嘆における意味の探求 心理学評論, 51(4), 485-499.
- 川島大輔 (2014). 自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック 新曜社
- Kawashima, D. (2015). Mapping the influence of loss. In R. A. Neimeyer, (Ed.), *Techniques of grief therapy: Assessment and intervention* (pp.113-116). New York: Routledge.
- Kawashima, D., & Kawano, K. (2017a). Parental grief after offspring suicide and adaptation to the loss in Japan. *Omega: Journal of Death and Dying*. online first.
- Kawashima, D., & Kawano, K. (2017b). Meaning reconstruction process after suicide: Life-story of a Japanese woman who lost her son to suicide. *Omega: Journal of Death and Dying*, 75(4), 360-375.
- 川島大輔・川野健治・小山達也・伊藤弘人 (2010). 自死遺族の精神的健康に影響を及ぼす要因の検討 精神保健研究, 56, 55-63.
- 川島大輔・近藤 恵 (編)(2016). はじめての死生心理学——現代社会において, 死とともに生きる 新曜社
- Murphy, S. A., Johnson, L. C., & Lohan, J. (2003). Finding meaning in a child's violent death: A five-year prospective analysis of parents' personal narratives and empirical data. *Death Studies*, 27(5), 381-404.
- Neimeyer, R. A. (Ed.). (2001). *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Neimeyer, R. A. (2005). From death anxiety to meaning making at the end of life: Recommendations for psychological assessment. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 12(3), 354-357.
- Neimeyer, R. A., & Anderson, A. (2002). Meaning reconstruction theory. In N. Thompson (Ed.), *Loss and grief: A guide for human services practitioners* (pp. 45-64). Basingstoke, UK: Palgrave.
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (1999). The dual process model of coping with bereavement: Rationale and description. *Death Studies*, 23(3), 197-224.
- 瀬藤乃理子・村上典子・丸山総一郎 (2005). 病的悲嘆に関する欧米の見解——病的悲嘆とは何か 精神医学, 47(3), 242-250.
- White, M. & Morgan, A. (2006). *Narrative therapy with children and their families*. Adelaide: Dulwich Centre Publications. (ホワイト, M. モーガン, A. 小森康永・奥野 光 (訳)(2007). 子どもたちとのナラティブ・セラピー 金剛出版)
- やまだようこ (1988). 私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理 有斐閣
- やまだようこ (編著), (2000). 人生を物語る——生成のライフストーリー ミネルヴァ書房